

◆『ボッコちゃん』（新潮文庫）収録作品 50 編の要約（ネタバレ注意）

	タイトル	要約	P
01	「悪魔」	氷が張った湖で釣りをする男が、悪魔の入ったツボを釣り上げる。悪魔に金貨を出してもらおうが、欲張りの過ぎて氷が割れてしまう。	9
02	「ボッコちゃん」 (10位)	バーのマスターが作った美人ロボットが大人気。彼女に恋をした男が父親から出入りを禁じられ、ヤケになってロボットに毒を飲ませると、バーの客もみんな死んでしまう。	14
03	「おーい でてこーい」 (5位)	村にできた謎の穴に「おーい」と呼ぶが返事はない。穴には、原発のゴミや不都合なものを捨てる処分場になる。そのうち空から「おーい」と声が聞こえてくる。	20
04	「殺し屋ですよ」 (33位)	決して証拠を残さない、完璧な殺し屋。その正体は、患者の寿命を医者に聞いてから、その患者を殺したい人間を探し出す看護婦だった。	27
05	「来訪者」	UF0 が地球に来る。外交官、企業人、宗教家など、いろんな地球人が対応するが、その対応ぶりは TV カメラで中継され、宇宙人がテレビ番組として楽しんでいく。	34
06	「変な薬」	カゼと同じ症状を起こして、すぐに治る仮病用の薬を発明。その後、それを教えた友人宅に招かれたときに、腹痛を起こすが、友人からは仮病だと疑われて死にかける。	42
07	「月の光」 (12位)	女の子をペットのように閉じ込めて育てたお金持ち。言葉を教えなかったため、金持ちが死ぬと、誰ともコミュニケーションが取れず、残された召使も育てられなくなる。	47
08	「包囲」	駅のホームで押されて殺されかける。犯人を問い正すと、別の二人の男に頼まれたという。彼らもまた別の二人に…。世の中みんなが私を殺したがっていた。	55
09	「ツキ計画」	ネコ、ブタ、ウサギなど、いろいろな動物を人間に「つける」研究所を取材に訪れる。「キツネツキ」になってみせてくれた所長から、ビールをふるまわれるが…。	61
10	「暑さ」 (18位)	暑さで何かをしでかしそうだと、逮捕を申し出る男。話を聞くと、アリ、カナブン、カブトムシと、毎年少しずつ大きな生き物を殺して発散し、刺激がエスカレートしていた。	69
11	「約束」	UF0 で到来した異星人が地球の子供たちと出会う。用事を終えた帰りに、願いを叶えてあげようと再び立ち寄ると、大人に成長した地球人は約束を忘れていた。	76
12	「猫と鼠」	殺人を目撃されて金をゆすられ続けた男が「窮鼠猫を噛む」ように、ついに相手を殺すことを決意。しかし実は、金をゆすっていた相手も、まったく別の男に殺人を目撃されてゆすられていた。	80
13	「不眠症」	不眠症の男が日夜働いて金を貯めるが、「眠り」にあこがれて、高価な睡眠薬を購入。目覚めると、事故の後に病院で眠っていた間の夢だった。目覚めさせるのに高価な薬が使われたため、日夜働き続けるはめに。	90
14	「生活維持省」 (2位)	犯罪も事故も戦争もない豊かで平和な未来社会。その裏では人口抑制策として「死ぬ義務」があり、無作為に選ばれた人が殺されるシステムになっていた。	95
15	「悲しむべきこと」	借金をしてプレゼントを配っていたサンタが強盗にくる。侵入された家の主人はサンタの肖像権を使って儲けている（競争相手の）デパートの金庫を襲うようアドバイス。	107
16	「年賀の客」	金だけのために生きてきた男が、友人からの借金を断る。友人が「生まれ変わる」と言い残して死んで 30 年ほど後、金持ちは孫娘から「お金」をたかれるようになる。	113
17	「ねらわれた星」	地球人をターゲットに殺し方を考える宇宙人。地球人の“皮”を溶かすピールスをばらまいたが、誰も死なず、みんな裸になってしまう。（中には喜んでいく者もいた）	119
18	「冬の蝶」	未来の生活。すべて自動化された快適な生活が停電で機能不全に陥る。寒さで家の主人たちが死んだ後、ペットの猿が木をこすって火おこしを始める。	122

19	「デラックスな金庫」	全財産をつぎ込んだ外側が銀、内部が金の金庫。強盗がやって来て、罠のように金庫に閉じ込められる。犯人逮捕の金一封で内側の金がまた厚くなる。	133
20	「鏡」 (20位)	13日の金曜日、向かい合わせの鏡で悪魔をつかまえた。嗜虐性を刺激する悪魔をいじめて日頃の鬱憤を解消し、幸福になる夫婦。悪魔が逃げだすと、夫婦は残酷な習慣が変えられずに互いに殺しあう。	136
21	「誘拐」	ロボットを開発する博士の赤ん坊が誘拐される。赤ん坊の泣き声を聞かせてほしいという頼みで、誘拐犯が耳を引っ張ると、ロボットの赤ん坊が爆発する。	149
22	「親善キッス」 (26位)	チル星にたどり着いた地球からの親善大使の一行。美しい異星人の女性とキスしたくて、これが地球のあいさつだと説明するが、チル星人の口はそこではなかった。	154
23	「マネー・エイジ」	すべてお金で解決する社会。子供との約束を破った父親も、いじめっ子も、遅刻もテストの点数も、裁判の証人も検事も弁護士も、すべてがお金次第の世界。	162
24	「雄大な計画」	ライバル会社にスパイとして送り込まれた新入社員。企業秘密を手に入れるためバシないよう真面目に働き、ついに社長の座を手に入れると、元の会社を裏切ってしまう。元の会社から「社長はスパイ」とバラされても、もう誰も信じない。	172
25	「人類愛」	人類愛にあふれた宇宙救助隊員。救助に向かう相手が眠って凍死しないよう話しかけると、偶然故郷が同じだった。地球→日本→東京→A区→302アパートまで同じだったが、助けないことにした。実はかつて妻に手を出した男だった。	178
26	「ゆきとどいた生活」 (39位)	未来の生活。朝起きて出社するまで、あやつり人形のように完全にオートメーション化されている。男が会社に着いたら乗り物の中で死んでいた。実は、心臓発作で、昨晚すでに死んでいたのだが、自動的に運ばれてきたとわかる。	185
27	「闇の眼」	暗い家の中。テレパシーの一種で暗闇の中でも周囲が見える子どもが生まれ、実験動物のような扱いで暮らしている。たとえ優れた能力があっても、人と違うことは不幸だと話す両親。部屋の明かりがつくと、子供には眼がなかった。	192
28	「気前のいい家」	家に来た強盗に対して、①論理的なこと、②機会を逃さないこと、③利益追求の精神が気に入ったと金を渡す。重さの増えた強盗を、床が割れる装置で穴に落として自白書を書かせ、その装置の30人目のセールスマンにしてしまう。	202
29	「追い越し」	捨てた女が「どこかで会う」と言葉を残して自殺。新車で追い越しをかけようとした車の後部座席に死んだはずの女がいて、気をとられて事故死する。それは、男に捨てられた女をモデルに作られたマネキンだった。	208
30	「妖精」	若い女性の前に妖精が現われ、なんでも願いを叶えるという。ただし、ライバルには2倍の願いがもたらされる。思案を重ね「ライバルの女に取りついて」と願うが、相手にはライバルと思われてなくて、自分の身に何も起こらない。	213
31	「波状攻撃」	次々と詐欺にひっかかる男。火災を起こす装置、高額な火災保険、自分がだまされたとわかった後も、今度は、犯人を捕まえませんかと探偵がやってくる。	221
32	「ある研究」	何の役に立つのかわからないおかしい研究に没頭する男。「毛皮が欲しい」という妻に反対されて止めたが、棒と板をこすって火をつくる研究だった。	228
33	「プレゼント」	異星人から地球に巨大な6本足の怪物が贈られてくる。各国は核実験の競争している場合ではないと一致団結して怪物を倒す。異星人は「6本足のかわいい生物を見たから、心が和やかになった」と勘違い。	233
34	「肩の上の秘書」	すべての人々が秘書のようなインコのロボットを肩にのせている。持主のつぶやきをていねいに、礼儀正しく翻訳してくれるが、本音と建て前のズレが浮き彫りになる。	238

35	「被害」	急に金回りがよくなった家に強盗が入る。金庫を開けさせると、中は空っぽ。実は貧乏神が封じ込めてあったが、強盗のポケットに入りこんだ。	246
36	「なぞめいた女」	記憶喪失らしい若い女性が保護される。思い出した番号に電話すると劇団の演出家の男が来て、演技が下手だと注意したショックかも知れないという。実は、今度「記憶を失った女」という作品を上演予定だった。	251
37	「キツツキ計画」	強盗団の首領が、たくさんのキツツキに押しボタンを押させる訓練をして街に放ち、大混乱の際に盗みをする計画を立てたが、放ったキツツキが最初に押したボタンは実験用の鷹のオリを開くボタンで、キツツキは食べられてしまった。	256
38	「診断」	精神病院に閉じ込められた男が「ここから出せ」と訴える。診断書を奪い取り、「これがあれば何をしても無罪だ」と院長の首をしめる。頭は働くが、自分には財産があるという妄想を抱いていた。	260
39	「意気投合」	地球の探検隊が別の星に着陸する。「相手の感情の変化を探知する装置」が歓迎を示し、もてなしを受ける。金属のとれない星で、すでに宇宙船はなくなっていた。	266
40	「程度の問題」	疑り深いスパイ。アパートに盗聴器がないか、レストランで毒を盛られないかと心配しすぎる。社会生活に適応できずかえって目立ってしまい、本国に連れ戻される。	272
41	「愛用の時計」	自分の時計を愛し過ぎるあまり、時計でなく時報が狂っているとまで思いこむ。時計が遅れたせいで、旅行に出るバスに乗り遅れてしまうが、そのバスは事故を起こす。	278
42	「特許の品」	異星人が特許をもつ「快楽装置」の設計図が発見される。地球人が勝手に量産した後、異星人が来訪して語るには「文明の進歩を停止させる装置」だった。	281
43	「おみやげ」 (42位)	文明以前の地球に宇宙人が立ち寄り、平和に暮らす方法やあらゆる病気を治す薬など、素晴らしいお土産を金属の卵に詰めて砂漠に置いてゆく。しかし地球人は原爆実験で、その贈り物を焼き尽くしてしまう。	287
44	「欲望の城」	「自分一人の部屋」で心休まる夢を毎日見る男。しかし、家の中に欲しいモノが次々とあふれ、次第に逃げ場のない場所でおしつぶされる悪夢に変わる。	291
45	「盗んだ書類」	研究所から新しい薬の製造法が盗まれたが、薬を調合して飲んだ犯人が自首してくる。実は「良心をめざめさせる薬」で被験者を探していたところだった。	296
46	「よごれている本」	古道具屋経由で古本屋で売られていた「魔法の本」を買った男。示す通りにやると悪魔が出て来て「魔王のための犠牲を集めている」といい、男を連れて消えてしまう。住人が消えた部屋の管理人は、部屋に残った本を古道具屋に売る。	300
47	「白い記憶」	ビルの角でぶつかり、記憶を失った男女。病院で目覚めて記憶が戻ると夫婦だった。二人はふたたび喧嘩を始め、病院の廊下の角でぶつかり、また気を失うが、医師はどうしたのかつぶやく。	307
48	「冬きたりなば」	すきまなく広告が描かれた宇宙船で、地球に似た星に訪問販売へ。次の春に代金を取りに来るつもりが、その星は細長い楕円軌道で、次の春は5千年先だった。	314
49	「なぞの青年」	遊び場のない子ども、身寄りのない老人など、困った人を助ける「キリストのような」青年。実は税務署の職員で使い込みをしていた。不祥事を表沙汰にたくない関係者は、青年をむりやり異常者にして病院に送り込んだ。	325
50	「最後の地球人」 (8位)	夫婦に1人しか子どもが生まれなくなり、みんな裕福になり、人類は明るく楽しげに滅亡へと向かう。最後に残った王と王妃は、裸で過ごすようになり、一人の赤ん坊を残して死ぬ。その子は、「光あれ」と声を出し保育器から広い空間へ出た。	331

※カッコ内の順位は「星新一作品ベスト50」の投票結果 <https://matome.naver.jp/odai/2131531298702383801>